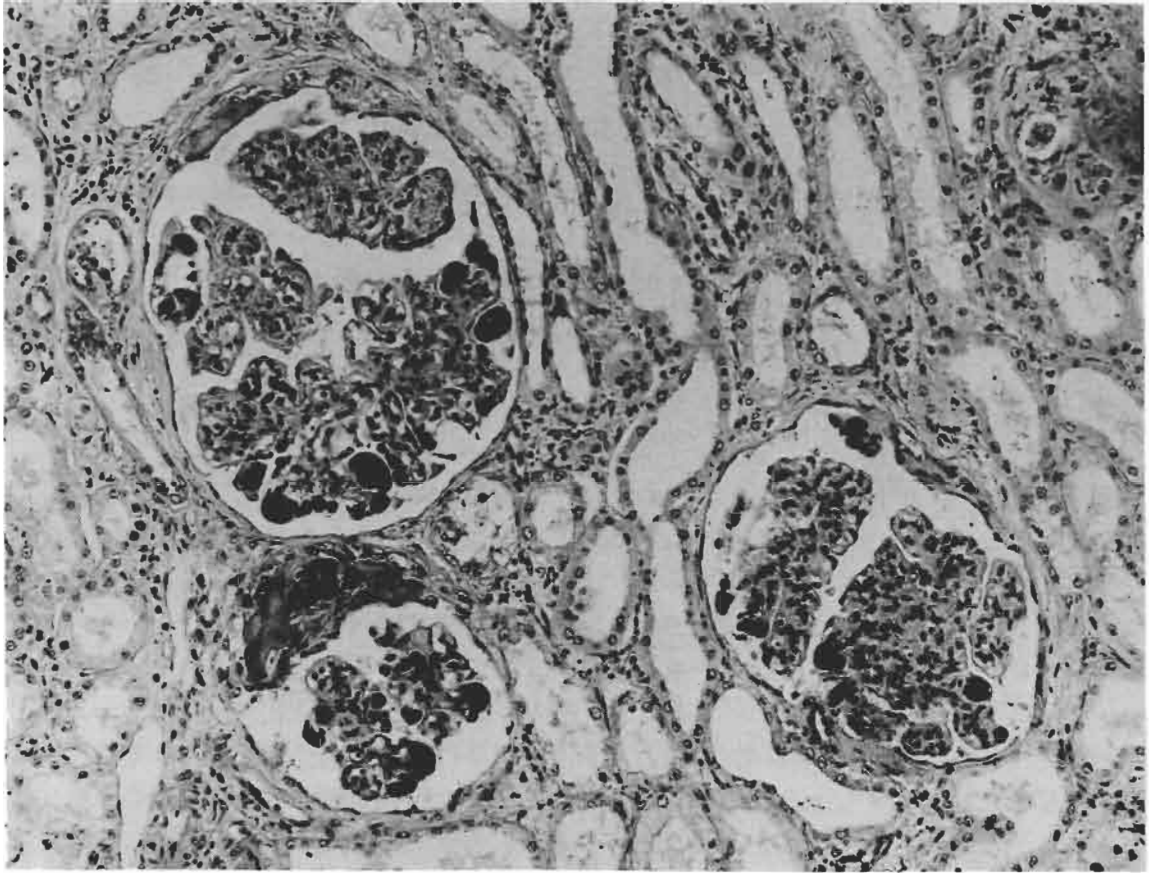


ウマの腎臓

北海道大学獣医学部比較病理学教室出題 第29回獣医病理学研修会標本No.516



動物：ウマ，アラブ，雌，19歳。

臨床事項：1988年1月から5月初旬にかけて，四肢下部の腫脹及び同部の壊疽を示しながら全身性衰弱を示した。5月下旬より一般状態の改善がみられ，以後8月初旬まで外見的な異常はなかった。6月8日の血液検査で cryoglobulinemia と診断され，経過を観察中8月24日放牧中に起立不能となり，放血殺後剖検された。

剖検所見：腎は両側とも被膜の剝離容易，褪色して皮質は混濁し水腫性。腎盂腔の粘膜は腺腫として増殖。

組織所見：大部分の糸球体は細胞核の増数を伴って高度に腫大し，分葉構造が明らかであった。そして多発性に，強好酸性の液状物質が，毛細血管では血栓様に，内皮下では球状ないしは帯状に認められた(写真，HE)。この物質の停滞・沈着を伴う血管では，内皮細胞の遊離あるいは核濃縮，基底膜の崩壊(PAM染色による)が所見された。さらに糸球体では，毛細血管基底膜の不規則な肥厚，メサンギウム領域の膠原線維増殖を伴った拡大も認められた。ボウマン嚢内には好酸性液性半月が散在

していた。ボウマン嚢周囲にはしばしば膠原線維が増殖し，これと糸球体との線維性癒着も認められた。まれには糸球体が虚脱して完全に線維化していた。糸球体に認められた液状物質はPAS陽性，PTAHで紫色，AZANで深紅色，ABC法による抗ウマIgGは陽性であった。

尿細管では，上皮の変性(水腫性，顆粒性，硝子滴)，ヘモジデリン沈着，基底膜の肥厚，ならびに散在性硝子円柱が認められた。間質には膠原線維増殖や水腫を伴って幅を増す部位が多く，局所的ではあるがリンパ球や形質細胞の浸潤も認められた。

診断：「ウマの cryoglobulinemia に認められた硝子様物質の血栓・内皮下沈着を伴ったメサンギウム増殖性糸球体腎炎」。本例の最も特徴とすべき変化は硝子様物質の出現で，これはヒトの本症あるいは macroglobulinemia で認められている。ヒトの前者での硝子様物質は，電顕では細管状または指紋様構造を特徴とするが，本例では高電子密度の微細顆粒状ないしは無構造であった。